

田郡新庄といふ所より出生ときく、右の境備後より、今の境宗右衛門正次までは四代也ときこえしとあり、是に徴據ば天文の間に、かの筋曲といひしを、天正にいたりては唐輪となへて、中人以下の女は常にゆひしとみえたり、髪なれども祝義の時はずげさて右の井筒女之助といふ名は、かぶき狂言などにて、女中たちも知れる名なれば、話柄にもとて、唐輪の考證のついでに、實傳を^{しる}しつ、件の事どもをおもひわたして、つらく考るに、かの髪上のさまをからゑを^{かし}げにかきたるやうなると、紫式部がいひたるその形状は、こゝに出す古圖の唐輪にやありけんかし、是は又も管見の強言にこそあれ、

〔松屋筆記 百三〕唐輪

按○中略唐輪は搦輪カウワにて、髪上の毛をからまきて、輪がね結ひたるゆゑの名也、美豆良はたおなじ、美豆良は兩引マツラにて、左右に列立るよしの名也、美と万は通音、左右を万マといふは、左右手を万マと訓るがごとし、

兒喝食風

〔貞丈雜記人物〕一古武家の子息、元服以前の童子の體は、今の世の如く前髪をわけず、又もとどりを折りわけず、髪の根を平元結にてゆひて、肩のあたりまで届く程に切り、さげ髪にする也、此體を喝食と云也、衣服はすあふを著して、^ゑぼしをかぶらざる也、元服の時、髪の先を短く切て、始て^ゑぼしをかぶる也、又髪を長くして、もとどりを平もとゆひにてゆひて、女のごとく下髪にしたるも有、此體を兒チと云、衣服は長絹するかんなどを著す、是も元服せぬ内は、^ゑぼしかぶらざる也、大名重き家にては、ちこの體を用常の人は、喝食の體にてありし様に、舊記に見えたり、

〔松屋筆記 六十九〕垂髮

垂髮は、童男女の髪を垂たる貌によれる名なれど、中比より兒喝食の事にいへり、ウナキ、ハナリ、ワラハ、メザシ、アゲマキなどのゆゑよしは、既に六十七の卷七十五に辨別せり、さて垂髮の字面